

TOKYO美人と、東京100ストーリー

新妻の悩み ③ 3回連載・前編(003 隅田川)

穂高健一

ジャンパー姿の井伊佳元は、店内の柱時計をみた。もう11時を回ってきた。かれはラフなスタイルで休日出勤し、早朝からバレンタインのデイスプレーをしていた。

きよの午後2時には、真鍋美紀まなべみきと逢う。『東京クルーズ』浅草発着場から出航する『隅田川ライン』の観光船に乗る、と約束ができていた。

かれはさつきから、妙な胸さわぎをおぼえるのだ。このモヤモヤはなんのか。またしても、遅刻し、観光船の出航時間



に遅れてしまうのか。そんな予感なのか。(あと30分以内、昼まえにはかならず店を出るぞ。どんなことがあっても、2時出航には遅れられない)

井伊は自分に言い聞かせていた。

かれの脳裏には、胸さわぎの原因のひとつとして、鬼頭統括部長の顔が浮かんだ。12月の店長会議は欠席した。鬼頭はそれについて一言もふれてこないのだ。もう1カ月半が経つ。これにはなにかある。裏がありそうだ、おかしいと、井伊はどこか心に引っかかるものがあった。

セーフティー池袋店は慢性的な人手不足で、いっこうに改善されていない。かれは独りで2時間かけてガラス張りのGケースを組み立て、照明の配線を工夫し、派手な装飾の販促物を取りつけたのだ。そして、チョコレート商品の陳列だった。

それには細ごまとした手が必要だ。かれはレジチーフなど女性3人の手を借りた。彼女たちは遊び感覚のしごとぶりで、食べたいチョコをあれこれ寸評していた。

(真鍋美紀から、チョコをもらえるのかな? 離婚問題がきょうにでも決着すれば、彼女とは会う機会がなくなる。夫との間がい



つまでも縛れ、解決が長引けば、それはそれで、彼女とはいつまでも逢えることになる)

真鍋美紀とはじめて会ったのは台場公園、歳末商戦の12月は店長会議があった日、そして鳳神社の西の市だった。1月に入ってから、美紀と浅草寺の初詣に出むいた。このごろ彼女と会えば、デートに似た感覚だった。

井伊はふとバレンタインの陳列作業まわりから、レジ従業員が1人もいないことに気づいた。レジチーフはすでにサービスカウンターに立つ。透明ガラスケースには、店舗巡回にきた鬼頭統括部長の姿が映っていた。

(一言、おれにも教えて逃げるよな。レジチーフ)

井伊は舌打ちした。それでも逃げる構えに入ったが、すでに遅く、鬼頭の視線と交わってしまった。さっきからの胸騒ぎはこれだったのか。

「きょうは喪服をきて仏様に、線香をあげにいかなくてもいいのか？ 八ヶ岳で死んだ学友の四十九日だろう」

鬼頭が井伊店長を睨みつけた。あえてこちらの私服姿にこだわる視線だ。

「これからです。自家に帰って着替えて、午後から法事にいきます……」

これまでずっと頭の隅にあった、いやな予感的中したと思っ

「浅草寺には46の支院がある。そうだったな。疑って調べさせてもらった。46支院は正しかった。このうち、12月1日に葬儀があったお寺は、3ヶ所ある、これも事実だった。ところで、店長会議よりも大切な、学友の葬儀はどこのお寺だ？」

「えっと。ちよつと度忘れしたな。……咽喉まで出かかっていくけど」

井伊は、まさか鬼頭が浅草寺まで問合せしないだろうと、甘くみていた自分を知った。いまとなれば、鬼頭はやりかねない性格だ、学友をうかつにも殺してしまったものだ、と背中に冷や汗をおぼえた。

「これから四十九日の法事にいくのに、お寺の名まえを忘れたのか」

「法事は寺でなく、自宅です。寺名と宗派は忘れてたけれど、住職がきて、仏壇のまえで、お経をあげる。そういうスタイルだ、と聞いているんですかね」

「まあ、井伊店長のこと

だ、すなおに言わないだろうと思ひ、私が3ヶ所の寺に、十二月1日の葬儀に、井伊佳元という参列者がいたかどうかと、それぞ



れ問い合わせてみた。疑問はとことん調べる、これがむかしから私のやり方だ」

「いやな性格だな、蛇年だ」

「それをいうなら、巳年だ」

鬼頭の目が冷たく光った。

「統括部長。その実、お寺は個人情報保護法で、喪主の了解をとらないと、参列者の名まえは教えられないといい、きっぱり断られたんですよ」

「いやな法律ができたものだ。店長も、そう思うだろう」

「いや、便利な法律だと思いますよ。なにかと都合で」

「隠しことができるし、ウソもつらぬける、便利で都合か。私には執念、というつよい武器がある。どの寺も、参列者の記帳まで関与していなかった。だけど、3つの寺とも、喪主の名まえは教えてくれた。もう一度訊くけれど、学友の葬儀はなんという寺だ？」

「あつ、思い出しました。法華寺」

「どこにある？」

鬼頭の目が疑いで光った。

「おもしろい質問だ。場所は浅草にきまっています」

「浅草寺の46支院は東京以外にも、各地に散っている。まあ、それはそれでいい。いまこの場で、法華寺に電話かけて住職につないでくれ。私が直接いろいろ訊いてみる。番号は104番で訊

けばわかるだろう」

鬼頭が店長用PHSのストライブを指した。

「……住職はこの時間、もう学友の法事の家に出かけているはずだし、ムダだと思うけどな」

井伊はPHSのプッシュを押した。予想通り、台東区浅草には法華寺という名のお届出はありません、という無機質な回答だった。

「最近のお寺はガードがかたいな。法華寺は迷惑電話防止で、電話帳に番号を載せていないのか」

そういいながら電話を切ると、間を入れず、鬼頭が質問してきた。

「亡くなった学友の名まえは？」

「ムリですよ、そこまでは」

「なぜ言えないのだ。隠す理由は？」

「戒名まで、覚えていませんか」

「ら」

「生前の名まえだ」

「やつは山形月山。何十年も芸名

で呼んでいたからな、本名は忘れてしまった。46歳にもなると、どうも人の名まえが苦手だ」



「芸人だったのか」

鬼頭は頭から信じていない顔だ。

「もちろんですよ。大道芸人で花笠音頭が得意だった。浅草の伝統ある木馬亭を中心として、活動していました。腹話術もできるやつだった。ときには地方巡業にも出ていた。半々くらいだったかな」

「逃げまわっても、真実はひとつ。いい加減に白状したら、どうだ。学友の葬儀はウソ。実は……、とほんとうのことを言うべきだ」

「事実と真実はちがう」

「茶飲み話とはちがうんだ。時間ももつたいない」

鬼頭の顔にはいらだちが浮かんだ。

「事実をお話します。学友の葬儀はわたしの勘ちがいで、1日まえの11月30日でした。これは事実。浅草の法華寺にいつてから、事実がわかったんです。いまさら店長会議でもないし、レポートは提出しているし……。本社の会議に、遅刻してまで顔をだすのも照れくさい」

「照れくさいだつて、どこの誰が？ 遅刻常習犯が白々しくよくいえるものだ」

鬼頭が怒りで顔を赤らめた。

「あの日は午後から、時間つぶしで、浅草にずっといました。これは真実です。学友の冥福を祈る気持ちから、やつが活動して

いた木馬亭で演劇を観ていました。家に帰れば、当日の半券も記念に残しています」

井伊の頭には、木馬亭で演劇をみる真鍋美紀の笑顔が浮かんだ。彼女との思い出のひとつとして、半券はいまなお財布に入れていた。

「重要な店長会議をすっぽ抜かす。それには目的があったはずだ。だれかと会ってたんだろう。おおかた女だろう。すなおに白状したほうがいい」

鬼頭は、取調べ検事のような語調で迫ってきた。

「たとえば、民間企業といつても、誘導尋問は違法だ」
ゆうどうじんもん

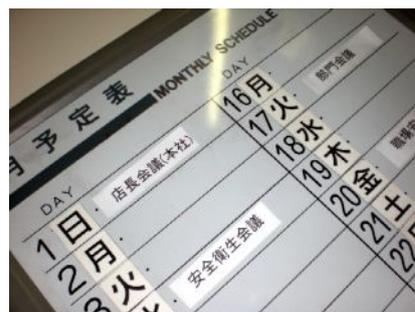
「相手は男か、女か」

「決まっているでしょ、女ですよ」

「話しは核心に入ってきたな。一つのウソが墓穴を掘るものだ。井伊店長は、別居ちゆうだ。色恋問題があつてもおかしくない。ぞっこん惚れた女だな」

鬼頭の目がにやつと笑った。それは獲物を追いつめた目でもあった。

「かつては惚れた女でした。いまは職場にきてまでも、思い出したくない」



「名まえは？」

「井伊雅美。会えば、別れ話ばかりの女房です」

「店長会議をサボってまで、女房と会う必要があったのか」

鬼頭はかっと怒った。他方で、まわりの客の目を意識したのだらう、鬼頭の声のトーンが落ちた。

「こみいった離婚話ですからね。このところ複雑な展開になって、退職金を慰謝料にして、別れてくれ。こんな内容ですよ」

「よし、奥さんの希望をかなえてやろう。きょうにでも、池袋店の管理職として、井伊佳元は不適任だと、解雇の稟議書^{りんぎしょ}をあげておく。店長は非組（非労働組合員）だから、30日の予告手当てを払えば、かんたんに解雇できる。首を洗っておくんだな」

「首を洗うにしても、きょうは銭湯が休みなんです。なにしろ、昭和中期に建てられた、ボロ家の借家ですからね。風呂のガス釜が壊れたままで」

「茶化すな。井伊佳元と、うちの松平会長とはどういう関係にある？」

鬼頭はこれまでも井伊店長にたいして解任とか、解雇の稟議書をあげてきた。商社からきたサラリーマン社長は、井伊の解雇に賛成で、決済印を捺す。ところがセーフティーを創設したオーナーの松平会長は、池袋店は3番目にできた伝統ある店舗だ、店長左遷コースの末路の断崖だといひ、その都度クビにするのは悪例だ、ここでストップさせよ、と反対だった。

「会長とか、社長とか、雲のうえの話しはまったくわかりません」
かれはまたしても柱時計を気にした。

「この陳列の仕方はなんだ。売れ筋のチョコがまったく出てない。これでも店長か。ずさん過ぎる。スーパーは主婦が中心だ。亭主や息子に贈るチョコが必要なんだ。こんな高額品ばかり並べても仕方ないんだ」

休日出勤してまで、鬼頭からガミガミ怒られると腹立たしい。（売れ筋商品はこれから陳列だ、統括部長がきたからレジ従業員が散ってしまった）

そう反論すれば、午後2時のクルージングの出航にはまちがいはなく遅れてしまう。ここはガマンだ。

鬼頭はあれこれ陳列の隅々まで、チョコの銘柄別に指図する
井伊は小うるさい話しを聞き流す

すために、浅草の初詣の後に立ち寄った、喫茶店の情景を思い浮かべた。喫茶から、コーヒー、おしるこ、あんみつ、昔ながらのスパゲティーマで、雑多な感じだ。店内にはデキシールランドジャズが流れていた。この不調和が、昭和の面影を残す、浅草の喫茶なのだ。

真鍋美紀には曲が古すぎたよう



も乱れています。ワンルームマンションで夜になると、独り身の寂しさを知り、夫が恋しくて、いたたまれず、泣くこともたびたびです」

という美紀が哀れで、井伊は胸が塞がれてしまった。同時に、気の毒になった。

「この世には完璧な夫婦など、どこをさがしてもいない。双方が妥協し、手を取り合い、長い人生とともに歩むことだ。とはいっても、おれの場合は、崩壊寸前の別居夫婦。偉そうなことはいえないけどな」

かれは苦笑しながらコーヒーを口に運んだ。笑いを誘うことばにも、彼女は乗らず、その目が涙ぼくなってきた。

「いろいろ考えてみました。毎週のように台場に現れる義母さんや、母親に頭が上がらない夫を考えると、一度決心したことだし、離婚をつらぬいたほうがいい、と自分自身に言い聞かせているんです。いまは悲しくて、辛いけど……あんなにも愛して結婚した、ふたりなのに。こんな結末になるなんて」

彼女の頬には一筋の涙が流れおちた。細い指先で、それをぬぐった。

井伊は黙って彼女の泣き顔をみていた。一年半まえの花嫁姿の美紀は、幸せで胸が膨らんでいたはず。いまは失望のどん底にいる。彼女の心境を想うとあまりにも憐れだった。

「わたしがダメなばかりに……」

こんどは花柄のハンカチで目頭を拭いた。

「このさい、おれがご主人に会ってみよう」

「どんな話しをされますか？」

「ダメな夫だと判断したら、妻を不幸にした諸悪の原因は、すべて夫にある。いさぎよく責任をとるべきだ。

台場ビューマンションのローンの支払いはすべてそっち持ち。ここまですると、弁護士法違反かな」

「夫をあまり苛めないでくださいね。わたしにも非があるはずですから」

「やさしいんだな」

涙顔の彼女から、夫の俊男の連絡方法を聞きだした。

その数日後、井伊は銀座ホテルで、俊夫に会った。話し合いのなかから、新たな展開の拡がりがあった。ひとつの結論がでてくる可能性が強まった。

美紀から電話が入ってきたのは、昨日だった。夫との話し合いがどうなったのか。10日近くなれば、それが気がかりで、電話をかけてきたのだろう。それには一言もふれなかった。井伊はデートの心境から、浅草からの観光船に誘った。彼女は快諾した。乗船したら、そこで銀座ホテルでの内容を話して聞かせる、と井



伊は約束したのだ。

「松平会長と、店長は親戚筋か」

鬼頭のことばが、井伊の思考を店内に連れもどした。

「会長とは縁もゆかりもありません。まったく無関係」

それは事実だった。

「悪運のつよい男だ。会長の温情に胡坐あぐらをかいている。統括部長として、井伊佳元をゼツタイに店長から引き摺ずり下ろす。バレンタインの陳列ひとつロクにできていない。おなじ池袋でたたく西武や東武や三越と比べ、ひどく見劣りがする」

（デパートと比べるな。この店はスーパーだ）

井伊はあえて反論を口にしなかった。

「稟議書には、店長会議に欠席し、どこぞかの女と会っている。本妻は怒りから、夫の退職を希望し、退職金の差し押さえをねがっている、とつけ加えておく。次の店長からは何年、池袋店に在籍してもよい。井伊だけはクビにしてくれ、と。それも書き加えておく」

「いい提案だと、また社長が喜びますよ。会長からは、統括部長は部下を育てられないけど、部下を選び好みする能力だけは抜群だと評価されます。きつと」

というと、鬼頭がぶ然とした。

突如として、店長を出せ、という男の怒鳴り声がかきこえた。井伊の視線が精肉売場のほうに流れた。

「きのうの夜、この店で買った、マトンの肉が腐ってた。真夜中から、下痢がはじまった。どうしてくれるんだ」

その男は角刈りの職人風の男で、40歳代の半ばくらいだ。

「この店は、腐った肉を半額に見切って売ってるのか」

巨体の精肉チーフが、太い腹をむりに折り曲げて謝りつづけている。

「ヤギの肉はあたると怖いんだ。

はやく店長を呼べ」

鬼頭の目もそちらに向いていた。社内で威張り散らしている鬼頭だが、外圧にはことのほか弱い。不都合なことが起こるとさつと逃げるのが常だ。

「お客さま第一主義だ、私服はまずい。店長ブレザーを着込んで、対応したほうがいい。こんな時間だ、さあ、次の店舗をまわらなければ……」

内弁慶の鬼頭が足早に店から立ち去っていく。もはや12時を回っている。

（良いときに、強請ゆすり男がきて、鬼頭を追い払ってくれたものだ。15分以内で片付ければ、浅草2時発の出航に間に合う）

井伊は私服のまま歩み寄った。

「何だ、おまえは」



角刈りの男はゴツゴツした顔で、タカブトムシを連想させた。

「この店の店長です」

「一部上場会社の店長たるものが、そんな私服か。やる気があるのか」

「やる気って、仕事のやる気ですか」

「当たり前だろう」

「やる気なんて、あるわけじゃないでしょ。きょうは休暇。忘れ物を取りにちよつと店に立ち寄れば、店長を出せですからね」

井伊は平然と構えた。

「おまえのところは、腐ったマトンの肉を売ってるのか。家族団らんでジנגスカンをしたら、女房と中学生と小学生の子ども3人が真夜中から、ひどい下痢だ。女房はきょうパート働きにもいけず、子どもは学校にも行けない。えっ、どうしてくれるんだ」

「病院は？」

「これからだ」

「真夜中に発症して、昼間までガマンしていたとは、理解に苦しむ？」

「なんだ、その言いぐさは。大手スーパーの店長がとる態度か。病院にお連れしましょう、というのが筋だろう。それとも、おれが嘘でもついていると言うのか」

「ちがうんですか」

井伊は、カブトムシ男の目を直視していた。

「なんだと。腐ったヤギの肉を売って、客に食中毒を起こさせ、誠意のかけらもないのか。この店は」

どの客も遠巻きに精肉売場を見ている。カブトムシ男は客の目をより多く寄せ集めるほどに、店長がひるみ、ことばを失う、と考えているようだ。

「ちよつと常識不足だな。マトンはヤギじゃない、ヒツジの肉。ラムは生後一年未満のヒツジ。マトンはだいたい2歳以上のヒツジ。その中間はホゲット」

「ヤギも、ヒツジも似たようなものだ」

「ヤギの飼育は乳搾り。ヒツジは羊毛か、羊肉。ずいぶんちがう」
「へ理屈いうな。腐った肉を売っていると、保健所にいうぞ。いいんだな」

「どうぞ、ご勝手に」

「客をなめてるんか」

カブトムシ男は興奮してきた。少なくとも、そういう態度で威圧してきた。池袋にはこの手の強請ゆすりが多いと、井伊は不快で、むしやくしゃしてきた。

「そんな怒鳴り声を、恥じも外聞もなく張り上げて、あんたはいい気分だろう。それでこちらが怖気づいて、金を出す、と錯覚しているんじゃないか？」

井伊は強気で応戦する態度にでた。あいてに弱みを見せない。それが恐喝男の撃退法だと、かれは長い経験から、それを会得し

ていた。

「俺が恐喝しているとしても、いうのか」

「そのために来たじゃないですか。8、9割は金欲しき。恐喝か、強請りか。それは司法が判断すること。スーパーの店内で怒鳴り散らせば、店員はみなへこへこする、誠意をみせろといえ、裏で要求に応じる、という迷惑をもっている」

「なんだと。女房や子どもが激痛で、死ぬ思いをしているんだ。ヒツジの肉だと偽って、ねずみか、猫の肉でも売ってるんだろう」

「いまの発言は営業妨害だ。刑法で罪を問える」

「なにが営業妨害だ。客をなめてるんか」

カブトムシ男の顔には、狙い通りにならない、強いいらだちがあった。

「じゃあ、ここは冷静に。商品はいつ買われたんですか」

井伊は声のトーンを落とした。

「きのうの夜8時だ。半額に見切られてたから、買った」

カブトムシ男は布袋から、おもむろに透明トレイを突き出す。肉は食べたらしく空だが、マトン肉の印字がなされていた。日付も昨日だった。

「発症したのは？」

「なんど聞くんだ。真夜中の12時だ。時間的に、どこの病院も閉まっていた。救急病院の医者が最近不足しているというから、家族全員で朝までガマンしてたんだ。いいかのか、保健所に訴えれ

ば、この店は営業停止になるんだぞ」

「妻子が死ぬ思いだつて。まるで危篤状態の口ぶりだ。それなら昼までガマンできるはずがない。朝、病院に行っていたはずだ」

井伊は毅然とした態度でいった。

「いまから、俺の家に車をまわせ。女房と子どもをつれて病院と保健所に連れていく。店長もつき合え」

「恐喝したければ、もっと食中毒の勉強をしたほうがいい」

「なんだと」

「黄色ブドウ球菌、サルモネラ菌、腸炎ビブリオ菌、ノロウイルス、どんな細菌でも体内に入つて、発症するまで24時間以上かかる」

「能書きをいうな」

「細菌による食中毒は、食べてから

丸1日、1日半、2日かかる。4、

5時間では食中毒にならない。その

くらい常識としてもってないと、ス

ーパーから金を盗れない」

「うるさい。つべこべ抜かすな。オ

レは本気になれば何でもやる男だ。

新聞社にも知合いの記者が何人もいるんだ」

「いまパトカーを呼ぶから、それに乗って警察署でも、保健所で



も、新聞社にでも、あんたの好きなところに行くといい。距離に
関係なく、パトカーは警官の護衛つきで無料だ」

「おれは客だ。それがお客にとる、店長の態度か」

「強請りや恐喝は犯罪だ。犯罪者はお客じゃない」

かれはPHSを取りだして、110番をプッシュする。

『事件ですか。事故ですか』という声がとどいた。

「事件です」

「事件じゃない」

男がそう吐き捨てるのと、あわてた態度で正面玄関から出ていっ
た。

「強請りの男は逃げていきましたから、もう結構です」

井伊はあらましを語った。

『ひとまず警察官を向かわせますから。事情を話してください』
と通信指令はいう。

「わかりました」

ここで警察から事情を聞かれると、およそ20分はつぶれてし
まう。防犯カメラのモニターを見させて欲しいといわれたならば、
なおさら時間をついやす。午後2時の出航には遅れられない。

井伊は同年代の店長代理を呼び寄せた。みためには鈍重だが、
鬼頭統括部長がきたとき、強請りの客が現れたとき、消防職員が
査察にきたときなど、逃げることに關しては敏捷だった。

「いまに警察が店にくる。柱の影から見ていた事情を説明してお

いてくれ。それと、バレンタインの陳列はもう終わりだ。レジチ
ーフには、品出しをしていたチョコを片付けさせてくれ。こちら
から指示しないと、他人事のしごとだ、まちがひなく正箱の段ボ
ール箱や、空箱はだらしく、そのままになる」

かれは池袋店を飛びだした。

1時間半後には、井伊佳元は銀座線浅草駅から、地下階段を駆
けのぼっていた。地上にでた。信
号が運よく青に変わってくれた。

ひろい交差点をわたると、真つ赤
な欄干の吾妻橋の袂が『隅田川
ライン』の浅草発着場だった。改

札口のまえで、真鍋美紀がかかる
手をあげて待つ。

「きょうは余裕だ。まだ4分まえ
だった」

「冷や冷やして待っていました。

いい加減さんがきのうの電話で、この船に乗るか乗らないかで、
わたしの人生が変わる。そんな風なことをおっしゃっていました
から」

入港船の汽笛が鳴りひびいた。川面の栈橋にはすでに乗船客が
大勢集まっている。

「切符はもう買っています。日の出栈橋まで」



「えつ。2時は台場行のはずだが？」
「台場には、もう行きたくはありません。いやな思い出ばかりです」

ふたりは観光船に乗り込むと、船尾のデッキを選んだ。船上の低い目線から浅草の街を見あげると、新旧の建物が入り乱れた、巨大な町だった。1月の風は川面をなでて冷たい。陽光が船内まで射す、手すりに寄りかかると、あたたかくて快かった。

「ご自宅から、浅草にいらしたんですか」
「いや、半日は会社に出ている。店長ひとりが休日出勤して、バタバタ働いたからといって、デパートに勝てるわけがない。そうとわかっているが、人手不足から、バレンタインの売場作りで出勤してきた。出かけ間際には、ひと悶着もんちやうあつたけれど……」

かれはニセ食中毒の強請男ゆすりについて簡略に説明した。

「怖い。強請りは多いんですか」

「一口でいえば、スーパ―は犯罪や事件や事故の宝庫だ。気の弱い店長の場合は、なん癖をつけられると、すぐ商品券で解決しようとする。おれはそれがいやな性格なんだ。すなおに応じたくないし、理不尽なお客にたいしては反撃もする。だから、本社に寄



せられる店長のクレームのなかで、おれが最も多いらしい」

「大変なしごとなんですね。お忙しいところすみません。わたし一人で解決できずに、いい加減さんに頼ってしまつて」

「美人に頼られて、男は悪い気などしないさ」

観光船のロープが棧橋からはずされた。

エンジンルームからの振動が靴底から全身に伝わってきた。船体が微速で棧橋から離れていく。船尾のスクリュー渦が水面にひろがった。

「銀座ホテルで、ご主人に会つてきたよ。ローンの支払いの面でも、精神面でも、別居がかなり堪こたえているようだ。美紀に全面的に詫びたい、悪いところは改さめる、もとの鞆さやに収まってくれ、といわれた」

「……。本心が見えない夫の話しよりも、きょうは隅田川のクルージングで楽しく過こしたいわ」

観光船が真っ赤な吾妻橋の3連アーチの橋下を潜かっていく。

「本心かな？」

井伊は彼女の顔をのぞき込んだ。

初詣の日のジャズ喫茶店で、美紀は『あんなにも愛して、結婚したふたりなのに。こんなことになるなんて……』と涙を流した。それと重ね合わせながら、彼女の現在の心境を推し量はかっていた。

「墨田川の観光船には、14隻も種類があるのね」

美紀の視線がパンフレットにむけられた。

「じゃあ、いやな離婚の話題は棚上げだ。ご主人の話は一切なし。おれの得意な、隅田川の歴史談義からいくとするか。朱塗りの吾妻橋は明治時代の初め、この川に最初に架かった鋼鉄製の橋なんだ」

大勢の庶民が近在のみならず、遠方からも吾妻橋の見物に押しかけてきた。当時は写真がないから、版画が絵葉書がわり。

それがお土産品として飛ぶように売れたという。

「当時の鉄は、西洋の炉で作られた、ぜいたく品だった。吾妻橋が木橋から鉄になった。人びとは、江戸から東京に変わったと、ひとつの象徴としてとらえたんだ」

「やはり、夫との話しを聞かせてください。気になり、落ち着きませんか」

彼女の視線がこちらにもどってきた。

井伊は一週間まえ、銀座ホテルのラウンジで真鍋俊男と会った。

……34歳の俊男はこざっぱりしたスーツ姿だった。思ったよりも長身で浅黒い顔である。学生時代は秀才で、社会に出てからはシャープで活動的な会社員、という印象をもった。

井伊はパソコンで作ってきた、【離婚斡旋業 井伊佳元】の名



刺をさしむけた。

「井伊よしもと、さんですね。離婚斡旋業とはどういう職業ですか？」

俊男は歯切れのいい口調だった。

「名まえを一発で、読んでくれたひとは数少ない。別居ちゅうの夫婦を別れさせる、それを職業としている。裏稼業だけど」

「美紀からの依頼ですか」

俊男が単刀直入に入ってきた。

「いや、別人だ。くわしく話せないが、依頼人はクッキングスクールの理事長の息子。具体的にいうと、都内の一つの料理学校を任されている、校長だ」

「校長がなぜ？ 私たちの離婚の依頼を……」

俊男が怪訝な目で、こちらの顔と名刺とを見比べていた。

「どこまでしゃべっていいのかな？ 奥さんは最近ある料理学校に通っている」

校長が美紀さんの容姿と、料理にぞつこん惚れ込んだ。きつと一目惚れだと思ふ。校長の年齢は42歳、離婚歴は一回のみ、関連事業の役員も兼ねた青年実業家だと、井伊は作り話を組み立てた。



「美紀が料理学校に通うとは、信じがたい」

「妻の行動を疑う。これ一つをとってみても、奥さんが愛想をつかした男だとよくわかる。別居という名の下に、奥さんに家出された。いい過ぎかな？」

「言いすぎです。夫婦のことは外部からわからない」

俊男が明瞭にいい切った。

「奥さんの別居の動機について、決定的な証言がある。それはさておいて」

校長は美紀さんの料理センスについて、磨けば、日本でも有数のクッキング・レディーになれる、と太鼓判を押している。いざれ料理学校の講師もおねがいすることになる。美紀さんが離婚して、自分と再婚してくれたら、校長は最高の人生がおくれる、と考えている。

「理事長の父親も、美

紀さんならば、フランス語が堪能だし、フランス料理の拡大もできる、と大賛成。和服も似合う容姿だから、フランス人などを招いたパーティーなども考えているらしい」

黙ってきく俊男の顔には、妻が他のものに娶られる、という



嫉妬の影が横切っていた。

「校長は立場上、人妻の生徒にアプローチをかけられない。それで、真鍋夫婦を正式に離婚させてくれ、と裏稼業の自分に依頼がきた。これが経緯だ」

「美紀が別居を持ちだしてきたとき、話し合いがつくまで、台場ビューマンションから出ないほうがいい、変な方向に行ってしまう、といていたのに……」

俊男は愚痴る口調でいった。

「それは事実とちがう。『マザコンとまでいわれるなら、自分が出て行く』と、ご主人のほうが言いだした。だから、話しが複雑にもつれてきた」

俊男が胸もとを衝かれたように黙った。

「この調査書をみると、新妻は結婚後、約一年半は苦悩の連続だな。ガマンの限界を超えている」

井伊はあえて身上調査書と明記したバインダーをのぞき込んでみせた。それは台場や浅草で美紀から聴取したもの。昨日のうちに、パソコンで打ち込んだきたのだ。

「美紀が書いて、あなたに手渡したんですか」

「職業上の秘密だ。その質問に応える義務はない」

「ボクたちは話し合いをすれば、元の鞘にもどれる。でも、美紀はケイタイをも着信拒否にしている」

「残された道は離婚のみ。静岡の義母の存在があるかぎり、奥さ

んは苦悩から解放されない。先ざきに光がない、苦痛のエンドレスは地獄だ。それに、あなたはみずからマザコン病を治療しようともしない」

「マザコン病とは心外な。嫁姑の問題は大なり小なり、どの夫婦にもある」

俊男がむっとした表情になった。

「その認識がそもそも問題だ。諸悪の原因になっている」

「ボクの家庭だけが地獄だ、とは思えない」

「あなたはがん細胞に似た、悪い性格がある。奥さんの手作り料理にたいして、毎度『お袋の味』と比べてきた。妻にとつて、姑と比較されることが一番イヤなことだ。いまどき妻の手作り料理を食べられるだけでも、幸せなのに」

「井伊さんは、いつも奥さんの料理を食べられてるんですか？」

「おれにたいする反撃は、本題から逸れそている。的外れだ。しかし、訊かれたからには、ご主人とこの場の信頼関係をつ

くるために、いちおう答えておく。女房は管理栄養士で、大学の非常勤講師。『食』がもてはやされるご時世だから、あちらこちらから講演依頼もある。しかし、おれは諸般の事情で、女房の料



理を食べていない。朝は駅の立食いそばが常食、夜は下町の居酒屋で、独りわびしく酒を飲みながら夕食だ。それはどうでもいいことだ」

「別居されている」

「否定しても意味がない。この報告書によると、あなたは味覚音痴を棚に上げ、奥さんの料理になん癖をつけている」

「味覚音痴？ はじめていわれました」

「ダイヤモンドの原石も、磨かなければ光らない。結婚すれば、夫は妻の料理を褒めてあげる。それが男のつ

とめであり、義務でもある。女は褒められるほどに、料理が上手になる。それなのに実母と比べて貶けなしてばかりだと、ダイヤモンドの原石もただの石ころ。離婚斡旋業の立場から客観的にみても、あなたは美紀さんの離婚を認めるべきだ。彼女に再婚の道を拓いてあげる。それが好きでいつしよになった男の最後の花道というもの」

「ボクは、離婚する気など毛頭ない」

「奥さんが日本一のクッキング・レディーになる可能性を秘めている、再婚を狙う男がいる、それを聞いて勿体なくなつた？」

「ボクはずっと美紀を愛しています。軽い気持ちで、お袋の料理



と単純に比べていた。悪意とか、嫌がらせとかでは無い。それが美紀の心を痛めているとは知らなかった。ただ認識がなかっただけです。これからは美紀の料理を誉めてやります」

「夫が、そういつてくれたんですね」

美紀がうれしそうな顔で、割り込んできた。

「そんな約束事は口先だけだ。少なくとも、ご主人の本心じゃない」

「あの人はウンをつかない人です。」

いい加減さんのように、何かにつけて機転を利かせ、その場、その場を取りつくるう性格じゃありません。わたしの夫ですもの。性格はわかっています」
観光船がスカイブルーの駒形橋を潜り抜け、若草色の3つのアーチが目立つ厩橋に差しかかった。

「そこまで惚気られたら、話しは打ち切りだ。さつさと二人は台場の鞘にもどればいい。さあ、隅田川のクルージングでも楽しむか」

観光船が黄色い蔵前橋を潜りぬけていく。橋下は4つの鉄骨の頑丈なアーチだった。観光船とすれ違った。となり合う外国人の家族がシャッターを切っていた。

「隅田川はその昔、きれいに澄んで、川底が見えていたらしい。」



夏には蚩狩りの名所で、浮世絵などにも残されている。墨田川は明治大正に入っても、文人たちに愛されてきた川だ」

「滝廉太郎の歌がそうですね。春のうららの隅田川……」

彼女は透き通った声で、4、5小節ほど歌った。

船体の喫水をふかく沈めた河船タンカーと、タグボートに曳かれた建設資材をつんだ台船とが上っていく。下流には総武線の鉄橋がみえてきた。右手が浅草橋駅で、左手が両国駅だ。突如として、彼女が歌を止めた。そして、こちらの顔を凝視した。

「銀座ホテルの、話しのつづきが知りたい顔だな。おれはご主人には、こういった。家事を手伝うふりをして、なにかと口出し、干渉してきた。女は家事のプロフェッショナル。その認識がまったくない。一つひとつに、なん癖をつけられた奥さんは、落胆を通り越し、絶望のどん底に叩き落されてしまったのだ、と」

「絶望のどん底だなんて、ちよつといい過ぎじゃありません」
特急列車が通過する轟音が頭上から降りそそいだ。列車が通過すると、静けさまでもどり、観光船のエンジン音が変わった。

「動物嫌いについても、ご主人と銀座ホテルで話し合ってきた。」



鳥を飼えば、家のなか汚れるといい、インコもかわさせてくれない」

「ボクの主張も聞いてください。マンションはガラス窓で密閉された空間です。鳥を飼えば、しぜん羽が飛び散る。鳥が原因で、間質肺炎かんしはいえんになったひともある。それを怖れたからですよ」

「ベランダで飼えば、そう問題はないはず。前向きに、話し合うべきだった」

「反省します。美紀が鳥を飼いたければ、ボクはもう反対しない。好きな鳥を飼えばよい」

「カラスでも、いいのかな」

「カラス……。美紀が飼いたければ、猫でも、犬でも」

「飼犬が死んだとき、死骸の処理はマザコンがやれる？ ペットに対する愛情は、死んだときが重要。それを確かめておきたい」

「マザコンはやめてください。美紀の頼みならば、ボクはやりませす」

「飼猫が台場の路上に出ていき、車に轢ひかれる。内臓がはみ出した。この場合は？」

「気色の悪い、シミュレーションだ。ビニールのゴミ袋に入れて、ぼくが処分してやりませす……」



「死骸をごみ扱いだと、愛情がない。ペットが死んで妻が悲しみにくれる。思いやりある夫ならば、火葬して墓を作る。ご主人の場合はおおかた鳥葬だといい、道端に置いたまま、カラスに食べさせる。きつと、そうだろう。こういう愛情のない人間は、そもそも妻に好かれない」

「決めつけしないでくださいよ。それはむしろ井伊さんじゃないですか」

「うまい反論だ。凶星。余談だが、自分はいま犬を一匹飼っている。もともと女房が買ってきた座敷犬だ。おれにはなつかず顔を見たら、近所迷惑なほど吠えていた。別居する際に、諸々の事情があり、女房がこの自分に押し付けたものだ。しかたないから借家の庭に犬小屋を作り、鎖でつないで、飼っている」

「座敷犬を鎖につないで、庭で」

俊男が安然としていた。

「野良犬に比べたら、ぜいたくなものだ。雨風はしのげる犬小屋がある。問題は餌だ。出社まえは忙しくて、犬に餌などやる暇がない。夜は夜で、居酒屋で食事だから、酒を飲みすぎて、餌をやることも忘れてしまう」

家主のオバサンがこれまた犬が大好き人間。犬小屋の掃除もしてくれている。9月と1月のスーパは、盆と暮ギフトの売れ残りを見切っている。それを買ってきて、オバサンに贈っている。

「先週はこんなことがあった。セーフティ池袋店から、年賀ギ

フトとして贈った。選んだ店が悪かった。半額シールがついたまま、包装されてオバサンの家に届けられた。あれじゃあ、池袋の住人はセーフティーよりも、安心できる西武や東武や三越を利用したがる」

井伊はセーフティー社員、と知る美紀がくすつと笑った。

この間にも観光船は、首都高の橋、オレンジ色の鉄塔が聳え立つ新大橋、あざやかな青色の清澄橋を通過していく。スカイブルーのアーチの永代橋にさしかかってきた。ここは忠臣蔵で、有名な橋だと、井伊が歴史をはさんだ。

元禄15年の12月15日、吉良邸で討ち入りを果たした赤穂浪士の四十七士は、泉岳寺にむかう。一行がわたったのが、この永代橋だった。討ち入りは美談だが、当時の敵討ちはご法度。犯罪者たちである。永代橋の橋番は民間人で、武士が守る他の橋よりも渡りやすかったといわれている。

美紀の顔は歴史よりも、夫との話題を好む表情だった。

「話しのつづきに入ろう。そのまえにオバサンについて、もう一言だけふれておこう。これが抜け目ないひとだ。半額ギフトだから、もうひとつ届くんでしょ、という。女は50歳近くになると、遠慮もなく、あつかましい」



「いい加減さんの厚かましさは2倍も、3倍も、それ以上じゃありません」

「見方によつては、そういう見解も成り立つ。残飯でいいのに、オバサンはこつちの了解もとらず、スーパーで餌を買ってきて与えている。領収のレシートを見せられるたびに、しかたなく払っている。犬を飼っているメリットは一つもない」

「犬嫌いというよりも、愛情の欠如ですね」

「銀座ホテルで、ご主人からも似たようなことを言われた。そのうえ、『井伊さんは飼犬が死んだとき、どうされますか?』と、歓迎しない質問までもむけられた」

「女房に電話をかけ、死骸を引き取らせる。女房がもともとペッコシヨップから買ってきた犬だから」

「ぼくには死骸を押し付けながら、調子のいい人ですね……」

俊男はあきれた顔だった。

「愛情の問題だといったはずだ。おれはもともと犬に愛情をむける気はない。女房にたいする愛情も冷め切ってしまった。大学生の一人娘は、これは別だけどね。とても可愛い娘だ」

「あなたは裏稼業人ですね。頼みがあります」

「ご主人からも依頼か。これは珍しいようでも、よくあるケースだ」

「美紀をよび戻す、いい策を伝授してもらえませんか」

「新婚夫婦のあいだで、最大のネックは黒船来航の母親だ。ここ」

をどう解決するかだ？ ご主人は大手広告代理店の企画部門だから、アイデア勝負のしごと。みずから考えたら？」

「それがわが身となると、なかなかアイデアが出てきません。とくに、わが母のことになると、腰が引けてしまつて」

「だからマザコンだ。なぜ、新居に訪ねてくる母親をびしっと断らない。優柔不断な態度が、諸悪の原因になっている。あなたはこういつているらしい。……週に一度だから、美紀が我慢すればいい、母親の小言などイチイチ気にすることない、聞き流しすればいい、と。これは夫として大いなる失言。いや失言を通り越した、大失態だ。そればかりか、姑が新婚のマンションにきて、その都度、窓ガラスの棧をこれじゃあな」と

と指先で、棧の誇りをこする真似をした。

「ぼくはなんども母に、いい加減にしろ、と注意しているんですかね」

「ここでも、いい加減が出てくるのか」

と説明すると、美紀がくすつと笑つた。

観光船の前方には、中央大橋の主塔が屹立する。三角形のハブ状に広がったワイヤーが橋梁を吊り上げている。陽をあびて輝く。



「ボクは静岡の母を歓迎していたわけじゃない。むしろ反対だった。母が台場ビューマンションにすれば、美紀はひどく緊張して他人行儀になるし、嫁姑がどこかギクシヤクした雰囲気はただよふ。それがイヤで、母から、そつちに行きたいと電話がかかってくる都度、断っていた。美紀を守るう、防波堤になろう、と」

「ほんとうかな？」

「疑わないでください。本音で話しているんですから。男はだれだって嫁姑でもめてもらいたくない」

「裏稼業人は、まず真実を見定める、心を見ぬく、本心をさぐる、それがこの職業の基本だ。この場は本音と信じよう」

「断りつづけていると、こんどは電話をかけないで、母が突然、台場にくるようになった。母は5年まえに父を亡くしているから、広い屋敷の独り身がさびしいらしい」

亡父は製紙メーカーの元重役だった。江戸時代の真鍋家は上級藩士で、300坪もある広い屋敷だという。

「母親への思いやりは大切。たしかにダダ広い家は寂しいものだ。自分のように下町の密集地で生まれ、子だくさんの貧乏な家に育つと、寂しさの実感はまったくくないけれど。これも余談だった」

「母親は若いころ女優に憧れていたらしい。だから、派手な東京が大好き人間です」

六本木や新宿に最新のビルがオープンすれば、上京してくる。新しい観劇の初日とか、日舞の内演会とか、諸々の口実で東京に

出てくる。

「さかのぼれば、結婚式は東京の一流ホテルじゃないとダメよと、ボクたちの結婚式にも口出ししてきた。美紀が人力車の花嫁になりたいというと、下町の泥臭い結婚式はダメ、と頑として反対だった」

「だから、西洋風のホテルで、結婚式」

「強引に押し切られました。母の先祖は家老だった。わがままなお嬢さん育ちの血が流れている。それがそのまま、いまの性格になっっている」

「台場にくる母親の真の狙いは、嫁から一人息子を奪い返したい？」

「それはないと思います」

「この場で、母の性格をあれこれいっても、事態が改善されるわけじゃない。抜本的な対応策を考えるべきだ」

「その方法が見つからなくて……」

俊男が頭をかかえた。

「もめ事には思いつき、閃き、熟慮、ロジック、先人の教え、いろいろな知恵を組みすれば、かならず解決の道がある。どんな難問でも、最後まで決してあきらめないことだ」

「もし秘策があれば、教えてください」

(つづく)



※ 後編も同時掲載しています

写真協力・モデルは、福本恵子さん（国際イメージコンサル
タント）

写真提供（和服姿）中島典子さん

【協力者と提供者は、本文と小さい関係ありません】